

— 生徒指導 (その7) —

## 生徒指導と学習指導

経営 研究 部

原 齋  
藤 洸 旦

〔問 26〕 「学習指導」に対し、「学業指導」ということばがありますが……。

〔答 え〕 従来、学習指導の中で、特に、生徒指導に関係する部分を「学業指導」とよんできた傾向があります。例えば、生徒の教科・科目の選択に関する指導、学習不適応に対する指導、ホーム・ルームにおける人間関係の調整、進路相談などの部分です。そして、この部分の担当は、主としてホーム・ルーム担任が当たり、これに対し、各教科の教師は、それ以外の「学習指導」つまり、教材についての理解を深めたり、技能を高めたりする指導に当たる、という考え方です。実際の教育では、そんなにはっきり区別されないとしても、意識の上ではそう考えてきた教師が、とくに、高等学校においては多かったのではないのでしょうか。しかし、今日、「学習指導」と「学業指導」とを区別することは、はたして妥当と言えるでしょうか。

高校入学者が94%を越え、生徒の能力、適性、進路志望などが多様化してきている現状に感じきれず、多数の学業不適応生徒を生じ、それが、ドロップ・アウトや非行につながっている事実にかんがみると、生徒指導的発想からはなれた学習指導などは、成立の余地がないのではないかと、つまり教科担当の教師による一時間一時間の授業そのものに、生徒指導的発想が要求され、学校経営そのものが、学習指導型から生徒指導型に切りかわるべきことが痛切に求められていると言うべきでしょう。

〔問 27〕 高等学校における、いわゆる「落ちこぼれ」の実態について知りたいのですが。

〔答 え〕 いわゆる「落ちこぼれ」を「授業についていけない生徒」とみ、中学校における全教科

の成績を、5段階相対評価に修正して、2.0未満の生徒を学力遅滞者とみなせば、その3割は高校に進学していません。つまり、すでに中学校における学力遅滞者の7割が現在高校に進学していることになります。この数値は10年前に比べ倍増し、高校を義務化すれば、更に1.5倍増えたとする、岡山・兵庫2県における推計があります。また、中学校の教師の意識調査では中学3年の英語、数学で、18%から19%の生徒が授業についていけないとみえています。\*

また、「落ちこぼれ」を学校からの脱落者、いわゆるドロップ・アウトとみ、その中に、退学、留年、親の転勤以外の転校者を含めた東京都の公私立高校における調査では、1%~3%のドロップアウトを出した高校は71.7%にもぼっています。平均1.5%の生徒が脱落しています。その原因は、学習不適応が27.6%、本人の性格行動が31.6%になっていますが、性格や非行も学習不適応と交錯していますから、半数以上が学習不適応からの脱落者とみてまちがいないでしょう。\*\*

福島県では、昭和54年度の全日制高校の退学者数は、872名で、前年度にくらべ89名増えています。全生徒数の1.18%に当たります。退学の理由は、学業不振、疾病、経済的理由、素行不良、その他(意欲喪失、家事都合、怠学、登校拒否など)となっていますが、学業不振と素行不良で、60%以上をしめています。

学習についていけない生徒をどうするかは、緊急の課題といえるでしょう。

\* 「高校教育義務化の可能性に関する基礎的研究」

名古屋大学 教育学部

\*\* 月刊「生徒指導」1977年12月号